



TITLE:

マルクス氏剰剰価値説の評論(三、完)

AUTHOR(S):

田島, 錦治

CITATION:

田島, 錦治. マルクス氏剰剰価値説の評論(三、完). 経済論叢 1922, 14(4): 637-648

ISSUE DATE:

1922-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127894>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷四十第

行發日一月四年一十正大

論叢

二重稅論

法學博士 小川郷太郎

我が國民所得の地方別研究

法學士 汐見三郎

マルクス氏餘剩價值説の評論

法學博士 田島錦治

小作制と小作法

法學博士 河田嗣郎

時論

華府會議に於ける支那關稅問題

法學博士 末廣重雄

我邦の營業稅を論ず

法學博士 神戸正雄

勞働保險に關する一考察

法學博士 山本美越乃

說苑

地學觀社會學説に就きて

法學博士 財部靜治

雜錄

獨逸の同盟罷業保險

經濟學士 岡崎文規

安倍^{法學士譯}「唯物史觀と餘剩價值」

法學士 水谷長三郎

竹内法學士譯「富國論」

法學博士 河上肇

マルクス氏餘剩價值説の評論（三、完）

田 島 錦 治

第六節 絶對的及び相對的餘剩價值の説明及び其批評

マルクスは資本を分ちて、不變資本と變易資本との二となし、不變資本は餘剩價值を生ぜざれども、變易資本即ち勞賃として勞働力を維持する所の生活資料に供せらるる所のものは、餘剩價值を生ずと思はせるは、前節に繰述せる如し。マルクスは此前提に本つき、餘剩價值を變更し及び増加すべき兩箇の原因を推論したり。

其第一原因は、一般に勞働者の勞働生産力を増加するに由るものなり。此勞働生産力の増加は更に二箇の原因に由る。其一は科學的發見、機械の發明、課業の新組織等技術的配備に由り。其二は勞働時間の延長、又は勞働時間を延長せざるも、之を延長すると同一效力を生ずべき勞働烈度の増加に由るものなり。上述の原因に由りて増加する所の餘剩價值を指して、マルクスは絶對的餘剩價值(der absolute Mehrwerth)と名けたり。

第二原因は勞働者の勞働の交易價值を低くするに由るものなり。マルクスの假定に従へば、此

價值は勞働者の生活維持費に由りて定まる、而して此價值に比して勞働力の生産物の價值が大なる丈、餘剩價值は大なるものなるか故に、縱令生産物の價值は同一に止まるも、勞働者の生活維持費即ち勞働の交易價值を低くすれば、餘剩價值を増加するを得べきなり。上述の原因に由りて増加する餘剩價值を指して、マルクスは相對的餘剩價值 (der relative Mehrwert) と名けたり。

上述兩箇の原因は、常に勞働者を犠牲に供して、資本主を利益す。例へば發明又は發見の現はるるあるも、勞働者の勞働時間は爲に減少せず。又例へば穀物、衣服、薪炭の價格が下落すとも勞働者の賃銀は同じ割合にて低下す。而して餘剩價值即ち資本主の利潤はそれだけ増加す。

マルクスは上述の思想を展開し、分析し、布叙し、或は詳にして密、或は要にして約、頗る舞文措辭の妙を盡す。而して假令氏の理論は一貫するか如きも、日常萬般の事實は最も明かに氏の説を否定せり。勞働者は必ずしも穀物衣服燃料等の價格の下落に比例して其勞賃の低下を見ることなく、生計程度は漸く高まり、食餌服飾亦曩時の比に非ず。葡萄酒、肉、珈琲、煙草、靴下、革靴、手巾等は一般に肉體的勞働者に由りて消費せらるるに至れり。固より各種類の勞働者に就て見れば、決して上述の如き生計程度の昂上に由りて各人同一の利益を享くと謂ふを得ず、中には不幸なる失職者、落伍者、貧窮者ある可しと雖も、全體より見れば此等は寧ろ少數の例外と謂ふを得べく、又彼等の中には、例へば懶怠、惡習、犯行、癡疾等に由りて、勞働を爲すの意思又

は能力を缺く所の者を含み、而して此等の總ては適當に労働者と稱し得へからざる者にして、且此等は決して現代に特發特有のものと謂ふを得ざるなり。由是觀之、マルクスが労働者生活維持費の減少は彼等の賃銀を同じ割合に低下せしめて、資本主の相對的餘剩價值を増加すとの説の事實に反するを知るなり。

マルクスの労働時間の増加が資本主の絕對的餘剩價值を増加すとの考はジョン・スチュワート・ミルに由りて裏書せられたる所なりと雖も、是亦實際の事實に符合せず。歐洲諸國の労働時間は舊て十二、十三、又は往々十四時の長きに迫ひたることありたれども、漸く減少して通常九又は十時となり、稀に十一時に亘ることあるに過ぎず、而して第二十世紀に迫ひては謂ゆる八時間労働の實施を各處に見るに至れり。マルクスが労働時間の増加と同様なる絕對的餘剩價值の原因として挙げたる労働の烈度 (Intensität der Arbeit) は氏の考に従へば、蓋し上述労働時間の減少を補償して尙餘りありとなすなり。然れども各國に於ける工場衛生及び其他労働保護の設備の進歩並に労働者の協同團結の自由の發展は、労働烈度の過度なる緊張を緩和し、阻止し、又は減退せしむるものあり。近來屢々起る所のストライキ又はサボタージュの如きは、實に労働の消極的烈度の増加を示すものと謂ふべきなり。且労働者の多數が攻撃的同盟罷業を絶えず敢行するを得るは、彼等の勞賃がマルクスの思考するか如き單に生活維持費に相當するか如き少額に止まらずし

て、其れ以上の餘裕あるを示すものなり。猶此點に關しては更に詳細に論すへしと雖も、要するにマルクスの絶對的並ひに相對的餘剩價值の説が事實に反對矛盾するは毫も疑を容れず。

今單に學理の上より考察するも、マルクスは資本主と企業主とを混同し、利子及び利潤の性質及び區別を明にせず。若し企業者の得る所の利潤か、果してマルクスの思考する如き簡單なる手段、即ち絶對的及び相對的餘剩價值より成るならば、利潤は有らゆる企業に殆んど同様に且確實に存在すへき筈なり。而るに實際に於て利潤は唯稀に大なることあるも、普通には僅少にして、往々絶無なる場合又は損失の場合すら有り。其理由は利潤がマルクスの思考する如き物の物に對する關係より生ずるに非ずして、實に人の物に對する關係より生ずるに在るなり。利子は物の物に對する關係より生ずれども、利潤は然らず。利子は資本の生産力に原つき資本主即ち資本供給者の賢不肖に因らずして生ずるものなれども、利潤は主として企業者の人格に基くものなり。此事は余が曩に本誌に連載したる論文「利潤の經濟的及び道德的性質に」於て詳論したる所なり。マルクスは利潤特に純利潤の性質を知らず、而して其知らざるは實に企業及び企業者の性質及び任務を知らざるに基く。氏は曰く「資本主としては彼は只人格化せる資本なり、彼の精神は資本精神 (Kapitalseele) なり。資本は單一なる生活本能を有つ、即ち自己を利用して餘剩價值を作り出すこと、詳言すれば其不變的部分即ち生産方便を以て、能ふ丈多くの餘剩勞動 (Mehnarbeit) を

吸收する本能なり。資本は既に死せる労働なるに、唯現に生ける労働の吸収に依りてのみ吸血鬼の如く活動し、而して吸収すること愈々多ければ、活動すること亦益々盛となるものなり」と。
(資本論第一冊一九四頁)。

夫れ斯の如く、マルクスは資本主と企業主とを混同し、資本主を以て人格化せる資本と爲し、又は既に死せる労働と爲す。特に知らず、資本は労働に頼りて活動し得ると共に労働も亦資本に依りて其機能を發揮し得、而して此兩者を適當に結合して各々相當の効果を擧ぐを得せしめ、即ち資本には利子を得せしめ、労働には勞賃を得せしむる者は、實に企業者の働即ち企業に在ることを。蓋し斯三者は恰も鼎の三脚の如く互に相頼り、相扶くる關係を成す者なり。但資本主の所得たる利子と労働者の所得たる勞賃並に企業者の所得たる利潤とを比較せば、前者は物の物に對する關係なれども、後の兩者は人の物に對する關係なり。利子は資本なる物と、其物の生産力の結果たる生産物なる物との關係より生ず。故に資本主の賢不肖勤惰老少生死に關係なく、苟も投資せられたる資本あれば、必ず世間並の利子を生ずへし。之に反して勞賃は労働者たる人、と其人の労働の結果たる生産物なる物との關係より生ず。故に勞賃の大小有無は労働者の生命健康知識道德の狀況程度と密接なる因果關係あるものなり。而して利潤特に經濟學者の謂ゆる純利潤(Pure profit)なるものは、企業者たる人と、其人の企業的任務の結果たる生産物なる物との關係

より生ず。即ち生産物の總價格より生産費（生産維持費を含む）を控除して猶は餘りあらは、是れ即ち利潤にして、此利潤の中より、若し獨占的利益又は幸運的利益あらは之を控除して尙は餘りあらは、是れ即ち純利潤にして、全く企業者の人格に本つく所の所得なりとす。夫れ是の如く利潤特に純利潤は人の物に對する關係を有つか故に、企業者の人格才能の差等に從ひ素より千差萬別にして、實際に於ては、至て少數の人のみ巨利を占め、多數は中位の利益を得るか又は其地位を維持するに止まり、而して其他は損失を蒙むることあるなり。然らばマルクスか全然企業者の人格を無視して人格化せる資本と看做し、彼の得る所の利潤は労働者の無償労働即ち餘剩労働より奪取するものなりと爲す者の謬れるは明かなり。

マルクスは本節の始に述へたる如く絶對的竝に相對的餘剩價值を定義したる後、資本主か其横奪者なることを斷言し、現代の工業家か往時西印度諸島に奴隸制度の行はれたる時の如く、又ダニューヴ河附近の諸州の貴族（Bojar）の賦役の如く成る可く多くの無償労働を労働者に課して、成る可く多くの餘剩價值を奪取するものなるを論し、而して餘剩價值の有償労働に對する割合は平均百パーセントに達すと思ふたり。即ち一面には生産技術の進歩は絶對的餘剩價值を増加し他面に労働者の生活を維持するに要する日用品の價格の低減は相對的餘剩價值を増加し、斯くしてあらゆる文明の進歩は、此資本主義的に組織せられたる社會に於ては、只單に資本主階級を利

益するに止まり、益々彼等をして労働者階級を横奪するを得せしむと論したり。

マルクスか英國經濟學者セニオル (Senior) 及びウイルソン (Wilson) 二氏の説を擧げて之を愚弄的に反駁するは、余未だ其可なるを知らず、セニオル氏等は企業者の利潤は(無き場合もあり得れども若しこれ有りとするは)其労働時間の最終時 (last hour) に在りと思ふ、例へば十時間又は十一時間の労働時間とするは、其最終即ち第十時間目又は第十一時間目の労働の生産物か企業者の利潤に該當すと思ふ。要するにセニオル氏等は自己の經驗觀察に依り、企業者の利潤が一割位に止まることを述べたるに止まり、決して労働時間が絶対に減少すへからざるを説きたるものに非ず。故に若し假にセニオルか企業の平均利潤を過小に見積りたりとするも、マルクスか其謂ゆる餘剩價值を過大に見積りたるの批難は之を免かるを得ざるへし。何となればマルクスは企業者と資本主とを混同し、啻に資本の利子の正當性を認めざるのみならず、企業の利潤の正當性をも否認し、此兩種の收入を一括して、労働者の過剩労働より生ずる所のものにして、其謂ゆる資本主の横奪に歸するものと思ふなり。(資本論第一冊一八五頁乃至一九一頁)

蓋し多數企業者の中には、マルクスの指摘せる如き陰險狡猾無情貪婪なる者も有りしなるべく、特に歐洲産業革命の起れる初期、即ち經濟學者が往々呼て大工業の混沌時代 (l'époque chaotique de la grande industrie) に際しては、マルクスの餘剩労働及び餘剩價值の説を裏書するか如き事實

か多く現出存在せしは毫も疑を容れず。是故にマルクス以前の學者にして、夙に同一又は類似の説を公にしたる者少からず。例せば英人トムソン氏か千八百二十四年に著はせる書 (Thomson's *An Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth most Conductive to Human Happiness*) の所論は慥にマルクスの餘剩價值説に先鞭を著けたるものと謂ふ可く。又佛人シスモンデ氏は其千八百二十七年及び八年に巴里に於て刊行せる書 (*Sismonde de Sismondi: Nouveaux principes d'économie politique*, t. p. 103) に於て "la mieux-value" の名稱を以て恰もマルクスの謂ゆる餘剩價值に相當するものを指せり。此他ブルードン氏か千八百四十年に著はせる書 (*Où est-ce que la propriété*, chap. 3) に於て述ふる所はマルクスに先つこと約四分一世紀に於て同様の説を最も精確に表示したるものとしてルロワ・ボーリユー氏の掲ぐる所なり。且氏はマルクスを以てブルードン氏の説を無斷にて剽窃したるものなりと斷言すと雖も、余思ふに當時産業革命の初期即ち大工業の混沌時代に際しては、斯の如き意見か期せずして諸國の學者論客の間に發生一致することあるは蓋し亦怪むに足らざるなり。(ルロワ・ボーリユー氏集 *民主主義* 二八七及二八八頁)

之を要するにブルードンやマルクスか科學の進歩、發明發見、及び産業組織の改良、分業協力の如き凡そ現時文明の進展に伴ふ所の利益は單に資本主の獨占に歸して、勞働者は毫も之か分前を受くるを得ずして、彼等は常に最小生活費を受くるに止まり、掠奪者の爲に日々多時の餘剩勞

働を無償にて提供するものなりこの意見は、或一時期又は或一地方に偶發せる事實の部分的説明としては或は之を承認するを得へきも、各時期に亘り及び各地方に通する一般的解説としては當らず。マルクスは米國植民地の奴隸を挙げ、ダニユーフ諸州の賤民を挙げ、此等の奴隸の主人又は貴族 (Bojar) と比較するに現代の工業家を舉げて、謂ゆる餘剩労働の飽くなき欲求 (der Heiss-hunger nach Mehrarbeit) が資本主發生以來世界に共通する一般的事實なるかの如く説明して頗る得意の狀ありと雖も、余輩を以て見れば、斯の如き事實は時間的にも又空間的にも共に部分的のものに過ぎず。之を譬ふればマルクスの考は一の都會に幾人かの傳染病患者あるの事實を視て、其都民全體が病毒に感染すると思ふ如く、又は非常臨時の烈風に遭ひて、常住絶えず風害ありと思ふか如し。マルクスの前半世は恰も大工業の混沌時代に當り、非常臨時の產業的烈風が吹き荒みたる時なり、彼の目睹せる英國の工業界は經濟的傳染病毒の襲ひ來れる處なり。曰く過長なる労働時間、晝夜兼業、曰く婦女少年の使役、曰く貧富懸隔の増大、失業者の増加等マルクスの絶對的竝に相對的餘剩價值の説を裏書する如き事實は出現したるは、余亦之を認むと雖も、久しからずして謂ゆる混沌時代は徐々に靜穩晴朗に復しつつあり。即ち労働時間は年を追ふて短縮し、婦女少年の夜業は禁止せられ、啻に彼等のみならず、一般労働者を保護優遇する所の立法及び施設は益々具備するに至れり。且之と同時に労働者の受くる勞賃は増加し、啻に其貨幣的即ち名義的

收入 (nominal wage) に於てのみならず、實際的收入 (real wage) に於ても亦増加し、從て彼等の生活基準は著るしく昂進し、中には多少の貯蓄即ち投資を爲し、資本主の資格を兼ねるを得たる者蓋し尠からずとす。夫れ然り、然らば則ち縱令今尙は幾分の貧困者あり、失職者ありとも、マルクスの思考する如く、凡そ勞働者なるものは彼竝に其家族の生活を維持する費用以外何物をも取得せずして、彼等は資本主の爲めに餘剩勞働を爲して、餘剩價值を生産するものなりとの説の偏見誤想たるは明々白白々亦疑ふの餘地無きなり。

第七節 結 論

以上數節に亘りて縷述したる所を約説すれば、マルクスは商品の循環を以て資本の起源と爲し及び貨幣を以て資本の出現する最始の形式と爲すは第一の誤謬なり。氏は資本を以て歴史的範疇に屬すと思ひ、其起源を貨幣的財産即ち商人の資本及び金貨の資本として現はると論し、而して資本は實に石器時代に於ても、又ロビンソンの孤島に於ても既に存在し、又は存在し得べきものなるを知らず、氏か使用價值と交易價值との區別及び説明は巧は則ち巧なりと雖も、使用價值が交易價值の重要な根源なるを忘れ、財貨の生産に要したる勞働力即ち勞働時間を以て其財貨の價值即ち交易價值の根源并に測度なるを論して、更に第二の誤謬に陥るべし。氏は更に勞働力

を以て一の商品と思考し、其價值は他の一般商品と同しく、之か生産に要する勞働力に由て測定せらるへしと思考せり。即ち資本主が購買する一日分の勞働力は此勞働力を維持するに要すへき一日分の生活費を生産すへき勞働力なりと思考し、此後記の勞働力は蓋し六時間にて足ると假定し、前記の勞働力は十二時間に達すと假定し、此十二時間と六時間との差は謂ゆる餘剩勞働にして、其生産物は謂ゆる餘剩價值なりと論したり。氏は此餘剩價值の説を敷衍するに當り、更に資本を分ちて不變及び變易の二種と爲し、竊かに其創見を誇るか如き態ありと雖も、此區別は更に氏の偏見誤謬を深甚ならしめたるに止まれり。若し果して氏の考の如く不變資本に屬する工場機械等は其生産物價值の中に減價補充を再生し得るに止まり、變易資本に屬する勞働者生活資料の價值か其生産物價值の中に一層多く再生するならば、資本主、否、寧ろ企業者は變易資本を成る可く多量に使用し、不變資本を成る可く少量に使用するを利益と爲すこととなる、然るに實際に於ては、人力に代り又は之を節約する所の器具機械其他生産的設備の投資高は大規模の工業に於ては益々増加し、而して此等の工業に於ては、他の人力を比較的多く使用する小規模の工業又は農業よりは大なる利潤を生みつつあり。

夫れ斯の如くマルクスの一の誤謬は更に他の誤謬を生み、前の矛盾は又後の矛盾を生ず、要するに其根本の誤は價值の眞理を解せざるに在るなり。

氏の謂ゆる絶對的并に相對的餘剩價值の説の如きは、啻に實際の事實に依りて反證せらるるのみならず、學理上大なる誤謬を含むものなり。即ち氏は啻に資本主と企業主との差別及び任務を理解せざるのみならず、資本の利子并に企業の利潤の性質を知らず。マルクスの眼は單に勞働の方面に向て開けるのみ、資本及び企業の方面に向ては長へに閉ちたり。否之を開くを欲せざるなり、宜なり其所説の偏頗にして中正を失すること。　（完）

正誤、本論文（一）即一月號（第十四卷第一號）の第四頁第五行并に第九頁第七行に循環論法とあるは匿證佯爭の誤